

森と共に生きるまち宍粟の

みどりじまん新聞



Vol. 3

令和3年1月号

たわ（ら、木育を広める活動を実践する木育インストラクターとしても活躍されています。

吉原さんは「身近な生活に木（気）づかいを」を活動のテーマとされ、

身近な森林や公園などでみられるスギ、ヒノキ、サクラなど約五十種類の樹種（じゅ

しゅ）を使い、木の性質に合わせて木工作品を作られており、その作品の一つひとつに、使った木の名前を記されています【写真1】。

そこには、「日本には

スギやヒノキが多いが

それだけではない、色や

重さなど樹種の違いを

感じてほしい」という吉

原さんの想いが込めら

れています。また、木の

名前はひらがなで書か

れていて、作品【写真2】

には「取って木て」など

親しみやすい名前が付

けられ、小さな子どもで

も興味を持てる工夫を

されています。

吉原さんは、木工作品

の販売や木工ワークシ

ョップを通じて木のぬ

くもりや楽しさ、面白さ

を伝えるための活動を

実践されています。

「千草こどもの園」の

環境学習

千草こどもの園は、兵庫県

洲本市にある幼保連携型認

定こども園で、1年を通じ

て、スウェーデンで行われて

いる自然教育プログラムを

取り入れた環境学習に取り

組まれています。

千草こどもの園では、子ど

もたちは雨が降ってもほぼ

毎日外に出て、園の裏山に入

り、山の中を遊び場として活

動されています。この山には

「森のムッレ教室」(5・6歳児向け)



【上記の写真はイメージです】

森のムッレ（スウェーデン語で「土壌（どじょう）」）教室では、子どもたちに「自然に出かけることは楽しい」を伝え、生き物や環境への気づかいと責任感が育まれます。

参照 <http://aurorakaori.blogspot.com>

「みどりじまん新聞」は

“木育（もくいく）”の視点を持って「森と共に生きるまち“しそう”」が誇る“みどり”の魅力を発信し、森や木に関心をもってもらうことを目的としています。発行にあたっては、「兵庫県立森林大学校」の学生が執筆し、学校での学びを生かして人と木や森林との関わりを伝えてもらいます。

「木（樹）と人の繋がりについて」

研究者 竹内 桜香

兵庫県立森林大学校では、毎年2年生の卒業研究発表会が行われます。卒業研究は、森林大学校での学びや実習の中で、さらに研究したいテーマを自ら設定し、卒業論文にまとめます。

私は、2019年3月に宍粟市内で開催された木育インストラクター養成講座の研修を受講したことがきっかけで、木（樹）のある暮らしの必要性を感じるようになりました。

そこで、卒業研究では、「木育」の取組を通して、各地の事例と宍粟市の現状を比較し、木（樹）のある暮らしとは何かを考えるため、人と木（樹）の関わりを「素材・環境・燃料」の3つのテーマに分けて研究しました。

今回は、卒業研究で調査した「木好 七郎左衛門（もっこう しちろうさえもん）」吉原さんと千草（ちくさ）こどもの園（その）の「素材」と「環境」の取組をご紹介します。

「木好 七郎左衛門」 吉原さんの木工

吉原さんは、滋賀県で「木好 七郎左衛門」という工房を開いて、木工作品などを制作する傍（か



【写真2】↑

取って木て

（手揚げホルダー）

アスナロ【写真1】→

ヒバとも呼ばれます。耐久性が高く、ヒノキチオールという成分を多く含むため、水に強く、シロアリなどを寄せ付けない性質をもちます。



スウェーデン発
自然教育

「森のムッレ教室」(5・6歳児向け)



【上記の写真はイメージです】

森のムッレ（スウェーデン語で「土壌（どじょう）」）教室では、子どもたちに「自然に出かけることは楽しい」を伝え、生き物や環境への気づかいと責任感が育まれます。

参照 <http://aurorakaori.blogspot.com>

「みどりじまん新聞」は

“木育（もくいく）”の視点を持って「森と共に生きるまち“しそう”」が誇る“みどり”の魅力を発信し、森や木に関心をもってもらうことを目的としています。発行にあたっては、「兵庫県立森林大学校」の学生が執筆し、学校での学びを生かして人と木や森林との関わりを伝えてもらいます。

木育ワークショップ



宍粟市内でも保育・教育の現場で、自然や木に触れる体験が実践されています。写真は、市内こども園で、木を使うワークショップでのこぎり引きをしている様子です。

木が好きな人を育てる「かきくけこ」
こどもの心を豊かにする

1歳頃から入るため、子どもたちはどこが危険か、また、何が危険かが分かるようになるそうです。もちろん、子どもたちが山に入る前には先生が安全を確認し、危険がないよう安全管理を徹底されています。

先生にお話を聞くと、「数の限られたおもちゃは、こども同士で取り合いのケンカになるが、森の中など園の外であれば、おもちゃの代わりになる素材は無限にあるため、ケンカにならない。あつるもので遊ぶよりも、自分で遊びを考えることができる環境は子どもたちの考える力と自然の中で遊ぶことが楽しいということを、五感を通じて感じることで、自然を大切にすることを育み、自ら考えて行動できる子どもへと育てていく。」と語られていました。

園のスタッフも、日本生態系（せいたいけい）協会が認定する「こども環境管理士」の資格取得をめざしておられ、子どもが思わず自然と遊びたくなる、そんな環境学習を実践されています。

「木（樹）のある暮らしを」

モノを買うとき、使うときは、そのモノを誰が作ったのか、そのモノにどういった思いが込められて作られたのかということに興味を持ち、知ることが大切です。

これから多くの人に木（樹）のある暮らしに関心を持ってもらうためには、顔の見える産地づくりとともに、木工をテーマとしたイベントの開催などを通じて、多くの人が木にふれ、木でモノを作る機会や作り手とふれ合う機会が提供されることが望まれます。

また、森林林業に関する人材育成においても、多くの人に森林や木材に触れるきっかけを提供することが必要です。森林大学校でも林業機械の使い方だけではなく、木（樹）を知る授業があります「写真3」。森林林業への関心を高めるには、イベントの開催、教育施設や企業での出前授業、企業の協力を得た職場見学会など情報を目にしたり、耳にしたりする機会を増やし、森林林業に興味を持つきっかけを提供していくことが必要だと考えます。

この「みどりじまん新聞」も少しでも木（樹）や森林林業に関心を持ってもらうことを目的にしています。みなさんがこれを読んだことをきっかけに、木（樹）のある暮らしに興味をもっていただけると嬉しいです。



〔写真3〕樹木医と木を観察

宍粟にある樹（その1）～千年藤～

宍粟市山崎町の大歳（ださい）神社には、千年藤の名をもつフジがあります。4月下旬から5月上旬の開花期には、淡い紫色の花房（はなぶさ）が1m以上垂れ下がり、境内（けいだい）を埋め尽くします。フジはマメ科のつる植物で、水はけが良く保水性の高い土壌を好みます。大きく2種類あり、ノダフジはつるが右巻き、ヤマフジは左巻きという特徴があります（千年藤はノダフジ）。花後（かご）に豆

鞘（まめさや）という実ができますが、栄養分が吸われて、次に咲く花が小さくなるため、こまめに切り取ります〔写真4〕。

また、傷に保護剤を塗ったり、水や肥料を与えたりして樹を元気にします。美しい花をつけるには、人による手入れが必要なのです。

花の咲く時期はもちろんですが、手入れする人に想いを巡らしながら、季節によって姿がことなる千年藤をぜひ観に行ってください。



〔写真4〕豆鞘の切取り



専修学校

兵庫県立森林大学校
Hyogo Prefectural College of Forest Management

兵庫県立森林大学校は、森林経営や森林林業に関わる人材を幅広く育成する学校です。令和3年度入学者の一般入試（第2回）は2月12日から3月2日まで受付けています。また、学校見学も随時受付中です。



県立森林大学校 HP